

三中だより

令和2年度 10月号



令和2年10月30日発行
荒川区立第三中学校
(学校通信 No. 9)
校長 小柴 憲一

運動会 感染防止対策と達成感の両立

10月24日(土)の運動会は恵まれた天候の中開催することができましたが、当日を迎えるに当たりましては、教職員のみならず生徒たちも一緒になって、新型コロナウイルス感染症の感染防止対策と運動会をやり遂げたという達成感を味わうことの両立を目指して、様々な調整を進めてまいりました。

当初は、「リレーなし」「団体競技・演技なし」、すなわち100

m走、1000・1500m走等のみで、「給食を食べて下校」という案もあったほどです。運動会実行委員会を選出する必要もないのではないかと考えられました。

しかし、先の2つの両立を目指して、「どうすればできるか」と前向きに検討していき、まずは、1年生の応援席を、例年保護者席になっている本部の右側

に設定し、2・3年の間隔を開け応援席の環境を整えました。また、その間隔のある環境で、マスクを着用するなら声を出してもいいこととしました。

さらに、練習を積み重ねるうちに、マスクを外してフィールド内などで競技順を待っているときの状況、演技とはいえ声を発する際にマスクを着用していないことの課題について考え、以下のような感染防止対策(抜粋)を徹底することとなりました。

- マスクをポケットで管理できる袋等を用意する。
- マスクを着用して教室から校庭に出る。
- 入場行進の隊形になるまではマスクを着用し、合図でマスクを外し入場行進を行い、フィールド内に整列したら再びマスクを着用する。



○ラジオ体操では、体操の隊形に開いてからマスクを外し、体操終了後マスクを着用して元の位置に戻る。

○100m走等では、3レース前になってからマスクを外す。

○2・3年学年種目はマスクを着用したまま行う。

さらに、給食は、当初、床に座って食べる予定でしたが、清掃をしていないこと、体操着についた砂やほこりが大量に床に付着していて不衛生であること、校庭から椅子を洗って拭いて教室に持っていくことにより多くの時間を費やしてしまうこと等の理由から、やむを得ず机の上に給食を置いて立食する方式をとることとなりました。

「クラス優勝は小さな目標、歴代1位が我らの目標」。運動会実行委員会が立てたスローガンです。私は、スローガンの「歴代1位」とは何かについて開会式で、私の考えるところを話しました。

○1つ、すべての活動において、過去に例を見ない、限りなく3密を避けた運動会とはこれだというものを成し遂げること。1つ、そのような制約の多い運動会でも、三中の伝統を受け継ぎ、誰もが達成感・成就感を得ること。それが、皆さんの目標を達成することになるのではないのでしょうか。

頻繁にマスクを着脱すること、招集所ではマスクをしていても私語を慎むこと、整列時に間隔を気にすることなど、競技や演技だけに



夢中になることのできない運動会でしたが、競技・演技中は一人一人の生徒が輝いていました。また、委員会として、部として、運動会の運営だけでなく、準備や片付けにも一生懸命取り組み、生徒たちは大変立派でした。

全校生徒で作り上げた、今年度初めての学校行事で、3年生は昨年度までの中堅学年ではなく最上級生としての貫禄

を見せつけることができました。2年生は昨年度までの最下級生ではなく、中堅学年としてこれから三中の機動力となっていくべき責任感をもつことができました。1年生はもう小学生ではなく三中の生徒としての自覚をもち、自治の力を高めることができ、今は何をすべきときかについて自分たちで判断して行動できるようになりました。

学校は学習をする場です。ただ、学習の中には教科による学習以外に、それらの基盤となる忍耐力、節度・節制、礼儀、他者を尊重する態度も養う必要があります。それらが伴って、結果的に教科による学習の力も伸びていきます。つまり、「自分で自分を



律して、つらさに耐えながら目標に近づこう」「周囲の友達も決して楽をしているわけではなく、同じように努力をしているんだ」というものの見方や考え方ができるようになり、社会を構成する一員としての自覚も高まっていきます。

運動会の練習中及び当日は、擦過傷・関節痛などでけがをしてしまったお子様もいるようです。学校では処置をしており、大事には至っていないと思いますが、ご家庭でも様子を見ていただければと思います。



そして、運動会練習期間中から当日まで、保護者の皆様には洗濯やバランスのとれた食事のご準備、朝練があるお子さんへの対応等、ご支援いただき誠にありがとうございました。

10月末、新型コロナウイルス感染症に対する国民感情は？

本校が、「感染防止対策と達成感の両立」を目指して運動会を開催したのと同じように、今、我が国は「感染防止対策と社会経済活動を両立させるために」という方向性になっています。

飲食業の営業時間の制限を解除したり、イベント会場の収容人数を段階的に増やしたりしています。また、自治体独自に「Go To ~」同様の事業の予算措置が執られるなど、人の行動が明らかに活性化されてきています。さらに、無観客だったプロスポーツも観客を動員するようになるとともに、選手同士が接触を伴う競技も国内外で開催されるようになりました。

いわゆる、緊急事態宣言発令中は考えられなかったことが、今では行うことができるようになっています。

このように至ったのは、きっと疫学的な見解や新型コロナウイルス感染症に対する研究が進んできたからだと思います。また、それでも、飲食店の経営者やイベントの主催者は、徹底した感染防止対策をとっていることと思います。

しかし、一番大切なことは、利用者・参加者・入場者などが、「感染防止対策はとられているけど、自分たち自身でもできる対策はとろう」という、経済を活性化させながらも感染防止対策をとるとい、国民一人一人の緊張感をもった行動ではないかと思うのです。

その点において、私は一抹の不安を感じています。

テレビの映像を見ていると、人出が戻った観光地でマスクを外して人混みの中を食べ歩きしている人がいたり、テラスで対面式で食事をとっていたり、イベント会場の出入り口や最寄り駅までの道が歩くのもままならないほど混雑していたりする場面を目にします。また、街頭インタビューに答えている若者グループの代表者が「かかる時はかかっちゃうので、それまでは好きなことやろうかなと思っています。」と発言していたり、年配の方でも「やれマスクだ、やれ消毒だなんてやっていると、むしろ精神的に不健康になってしまいますよ」と、どこかから借りてきた言葉を言ったりしています。

つまり、経済を活性化させるために、様々な今までの厳しい制約を緩和させることが、一部の人たちにに対して「もう大丈夫なんだ」という誤った理解をもたらしているようです。

先ほどの街頭インタビューの回答の例のように、どんなに注意していても、感染してしまうときがあるのは事実ですし、それらの人を責めてはいけません。しかし、少なくとも季節性インフルエンザへの対応と同等の体制が整うまでは「正しい恐怖感」を忘れずに、社会経済活動に参画していかなければならないのではないかと思います。